

三宅敦子(西南学院大学)

松岡光治編『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化
(生誕百五十年記念)』

あれは中学にあがったばかりの頃だろうか。父の書棚から何気なく手にした本の表紙には *The House of Cobwebs and Other Stories* という文字が連なっていた。“Cobwebs” とは「蜘蛛の巣」なのかと感心する私の背後にいつの間にか立っていた父は、それが学生時代(昭和33年)に勉強した英語のテキストで、貧困を扱ったいかにもつまらないものであるかを説明してくれた。

時代の変化は恐ろしい。昭和33年といえば、東京タワー完成と皇太子ご成婚のニュースに沸き、漠然とした希望の明かりに照らされ、後に高度成長期の原点とされる年である。けれどその実、貧困や結核がまだ身近な問題であったこの時代に教養英語の授業で学んだギッシングは、経済学部の学生であった父にとっては退屈極まりない代物であったようだ(父を教えた英語教師は旧制高校の出身者であったのかもしれない)。しかし、「貧困」という2文字に代わって「格差社会」や「ワーキングプア」という言葉が連呼される21世紀の幕開けに生きる英文学科の学生にとって、ギッシングはなぜか共感をよぶ作家のようだ。授業でギッシングにまったく言及しなくとも、卒論にこの作家を取り上げる学生が年に一人はいるのである。ギッシングの作品研究であれば、没後百年の2003年に出版された『ギッシングの世界』(英宝社)に主要作品の粗筋と論考があって推薦できるのだが、英文学科の卒論も文学研究から文化研究にシフトした感がある昨今、学生のニーズに合った日本語の文献を探そうにも、これがなかなか見つからなかった。

2007年度学術振興会助成出版である本書は、そのようなギッシングの日本における研究史の穴を埋め、この作家の魅力を余すところなく教えてくれる良書である。学会の大御所から現在活躍中の中堅・若手研究者までをバランスよく揃えた25名の執筆陣(故・村山敏勝氏もその一人)からなる本書が何より素晴らしいのは、これが極めて“integral”な論文集であるという点だ。上下二段組みで550頁にも及ぶ本書の目次とその内容の要約は紹介サイト <<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/gg-150.html>> に任せ、ここではこの“integral”な点を中心に評したい。

一人の作家を通してその時代の社会と文化を見るというタイプの研究書は、得てして中心となる作家が周縁となる社会・文化のどちらかが空洞化する危険に陥りやすい。そうするとアンソロジーとして編纂されても個々の論文が独立してしまう。ところが、本書はアラカルトとしてつまみ食いをして、フルコースとして通読しても楽しめる二度美味しい本なのだ。もちろん25本の論文の中には社会・文化への目配りが利いていなかったり、ギッシングに関する記述が少なすぎるものもある。しかし通読すると、ウェブ上で執筆陣

が密接に連携を図った成果なのだろうか、ギッシングにまつわる有名なフレーズや思想は各論文で繰り返し言及されるため、素人の読み手でも読後には「ひとかどのギッシング通」になっている、という具合なのである。また、約 1,700 項目からなる「索引」は英語併記されており、出版年、生没年、年号が完備されて、ヴィクトリア朝の研究者にとっては実に便利である。

本書のさらに優れている点は文字情報だけでなくヴィジュアル情報も豊富であるという点だろう。二段組となれば昨今の学生を圧倒しそうな情報量だが、それが全く負担に感じられないのは 2~3 頁めくれば必ず挿絵や写真が登場することに負うところが大きい。その挿絵や写真も、かの『パンチ』誌の挿絵からラファエル前派の絵画、イタリアの遺跡の写真や地図、言及された小説の映画化の一場面と幅広い。第 8 章「出版 - ギッシングと定期刊行物」の扉絵には、『コーンヒル・マガジン』に連載された『人生の夜明け』（『命の冠』となっているキャプションは間違い）の最終ページと見開きの形で、ついこの間まで店頭でよく見かけた黄色い小箱でお馴染みの「コダック」社のカメラ広告が掲載されているのだが、この扉絵の選択は心憎いほどだ。この扉絵が視覚に訴えるメッセージは本書を支える信念と重なるからである。

松岡氏は「まえがき」で「本書が後期ヴィクトリア朝と極めて似た状況にある現代の日本社会に内在する諸問題を読者に直視させ、その解決の糸口を見出すのに示唆的で意義のある見解を示してくれるはずだという信念」を持って本書を編んだと述べている。この過去と現在の連続性への信念は他の執筆者にも共有されているが、今の我々にとって必要なのはまさにこの「温故知新」という姿勢かもしれない。カメラ付携帯電話がコダック社の箱入りフィルムに取って代わってしまった Web2.0 以降の世の中はますます右傾化し、泥沼化するテロとの戦いの最中にある。五感で感じる製品の消費ではなく仮想空間にあふれる情報の消費を強いられる日々の中で、繋がっているようでいて繋がっていない人間関係を生きている我々は、生誕 150 年目を迎える「平和主義者を標榜した」ギッシングがその「両価感情」ゆえに抱えた苦悩を共有しているのかもしれない。本書はむしろギッシング研究の価値に疑念を持つ人や素人にこそ勧めたい研究書である。